



ひげのスコープ!

Scope of beard

新しい年。鶴や亀は長寿の縁起物。両者を描いた年賀状が行き交う光景。想像は難くない。

癒されたい、あるいは、好奇心にかられるまま、できる範囲の**観察と実験**。気温が低いこの時期は、特に、生きているか、少しは動くかの確認に終始。こうしたようむきで、自宅3階のベランダにいく。

筆者は、主治医による健康維持の指導に従い、早朝のウォーキングが日課の一つ。その折、平成29年4月初め、川原で眼に留まった黒い石。手にすると、何と、亀。冬眠明けか、動作が鈍く、保護を決め込み自宅に持

ち帰っている。体形など、画像やスケッチでご覧いただければ、直ちに納得いただけよう。文字での表現には限界があるが、ご想像あれ。甲羅は縦横約8cmと13cm。頭は、同じく2cmと4cmの大きさ。足は、4本とも、約3cm長。しっぽの長さは4cm程度で、体の厚みは甲羅を含め約5cm。断定はできないものの、甲羅より外側に総排泄腔を観た記憶をたどれば、オスと判断している。

小学校に通常置かれている飼育委員会。そこでいう飼育とは言い難い彼の居住環境。というのも、亀の習性に適い、野生の生活環境に近い、例えば、隠れ家などなく、大きさは、縦横高さそれぞれ約30、40、15cmの水槽に、今は底から10cmほど水を満たし、底面の半分ほどを10数個の小石で覆い、夏の頃は甲羅干しに使用していたやや大きめの石を一つ置いているに過ぎないからである。

そうはいうものの、保護し付き合い始めてすぐ、自宅近くのホームセンターで、亀の健康維持と、水の臭いと汚れを抑えるという、納豆菌と酵母菌そして乳酸菌が調合されたえさを購入。当時から10月初め頃までは、3、4日に1度は水を取替

える日々の緊張の連続で、筆者なりの愛情を表し注いだ。現に、この間、近寄って観れば、頭をグツともたげ、物欲しそうに、いや、水槽の壁にぶち当たるほどの勢いで、ガツガツとえさを求め、筆者はこれに応えた。好奇心が強く共生できる動物の一つの証しであろうか。

かのカメ君、10月半ばから活動が鈍くなり、

今は、水中深く、ほぼ静止状態。冬眠中。験しに米粒二つ程度大のえさを口先に一つ落としても、見向きもしない。冬眠からの目覚めを待つ日々。

きょうようと
きょういくのまに

11

東京学芸大学名誉教授 篠原 文陽児

教材・教具、あるいは、メディアの設計と開発そ

して利用は、特に、学習者を中心とする今日的な教育課題の一つを実現するキーであることに異論をはさむ者はいない。

R.M.ガニエと並ぶ授業設計の雄の一人L.J.ブリッグスのメディア概念は、学習状況を引き起こす総体としてメディアをとらえ、野外観察と実験を含み、わが国のそれの一つと相通ずるものがある。つまり、昭和42年制定の「教材基準」が、今日、「教材整備指針」として、その趣旨と内容の改善が図られてきていることは別にして、昭和29年文部省令第31号の理科教育のための設備の基準に関する細目を定める省令の、直近平成28年文部科学省令第4号の附則改正では、いわゆる視聴覚メディアの典型である標本と模型と並ぶ表記で、野外観察調査用具、実験機械器具、その下位項目に生物の飼育・栽培用具を記しているからである。

一年の計は元旦にありという。改めて、俯瞰的かつ長期的なスコープを念頭に、好奇心を刺激し日常経験と関連づけ、学習への動機づけにさらに寄与する視聴覚教育の推進方策を考えたいと思う。